

看護学科助手・助教会実践報告

—— 学生参画型看護教育の効果的な学びの「場」作り ——

溝口 広紀, 新城 慈, 松田めぐみ, 野崎 希元, 島袋 尚美, 新里美智子
浦添 美和, 野原 萌, 安仁屋優子, 仲村 怜, 九津見彩子, 大浦 早智
西田 涼子, 長嶺絵里子

Practice Report for the Association of Nursing Assistants and Assistant Professors

—— Creating a place for effective learning in student participatory nursing education ——

MIZOGUCHI Hiroki, SHINJYO Megumi, MATSUDA Megumi, NOZAKI Marechika
SHIMABUKURO Naomi, SHINZATO Michiko, URASOE Miwa, NOHARA Moe,
ANIYA Yuko, NAKAMURA Ryo, KUTSUMI Saiko, OURA Sachi
NISHIDA Ryoko, NAGAMINE Eriko

【実践報告】

看護学科助手・助教会実践報告

—— 学生参画型看護教育の効果的な学びの「場」作り ——

Practice Report for the Association of Nursing Assistants and Assistant Professors

—— Creating a place for effective learning in student participatory nursing education ——

溝口 広紀, 新城 慈, 松田めぐみ, 野崎 希元, 島袋 尚美, 新里美智子, 浦添 美和
野原 萌, 安仁屋優子, 仲村 怜, 九津見彩子, 大浦 早智, 西田 涼子, 長嶺絵里子

要旨

名桜大学看護学科(以下, 本学科)は, 教育の特徴として学生自らが学び主体として成長していく参画力を身につけるために, KJ法を応用した図解法(以下, 「カードメソッド」)を取り入れた「参画型看護教育」を実践している。「カードメソッド」は自己と他者との対話を通して体験や考えについて語り合うというプロセスが重要であり, そのプロセスを踏むことで, 自分や相手の体験に関心が向けられ, 共通性を発見しお互いに相手を理解したいという気持ちが生じる。しかし, このようなプロセスが踏まれないまま, 「カードメソッド」が実施されている現状がみられている。

そこで, 本学科の助手・助教で構成される「助手・助教会」(以下, 本会)において, 「カードメソッド」を実践した。目標には『「カードメソッド」の実践を通して『自分の経験を伝える・相手の経験を聴く』体験から, 参画型看護教育の効果的な学びの『場』について考える』を掲げ, 「参画型看護教育における効果的な学びの場とは?」というテーマで学習会を開催した。

本稿では, カードメソッドの結果から抽出された「教員と学生が共に参画して学びの『場』を創造するための教員の姿勢や役割」について報告する。

キーワード: 参画型看護教育, カードメソッド, 助手, 助教

I. はじめに

本学科は2007年4月に開設され, 今年で12年目を迎えた。本学科は「参画型看護教育」を取り入れている。「参画型看護教育」とは, 学生が自ら学び主体として成長していくために参画力を身につける体系化された教授法¹⁾である。「自己との対話」, 「他者との対話」, 「地域との対話」をとおして, 「個の自立と成長」「個の学習目標の達成」「自己教育力の育成」を目指している。教員は, 学生が自分自身を学びの場にコミットメントさせることで学生の学びが深まるよう支援している。

その1つの支援方法として, 開設時から「カードメソッド」を用いることで, 学生一人一人の考えを可視化して他の学生と共有している。これは, 開設時から継続している本学科独自の技法である。「カードメソッド」は,

学生一人一人の思いを言語化して付箋紙に書き込む。そして, 沖縄の方言の「ゆんたく(会話)」を通して他者に伝えるというプロセスをとっていたことから, 付箋紙を「ゆんたくカード」と命名し用いていた。「カードメソッド」は, 学生がその場に参画することから始まる。「自己との対話」は, 学生が提示されたテーマに対して, 自分自身に問い直して, 考えを「ゆんたくカード」に記載する過程で行われる。「他者との対話」は, 他の学生が提示した「ゆんたくカード」の内容についてより正確かつ深く理解することを目的とした質問などを行うことで, 自分の理解が正しいのかを確認する過程で行われる。この2つの対話を繰り返すことにより, 自己の思いや傾向などに気づき, 他者に対する理解や自分と違う意見に対する理解などが深まり, その結果, 学生の学びが促進される。本学は沖縄県北部12市町村による公設民営の大

学として開学した経緯から、学生が主体となって地域住民に対して健康体操や健康チェック、イベントのボランティア活動を継続して行っており、このような環境の中で学生は「地域との対話」を行っている。「カードメソッド」は、現在も各学年の目標の決定や、学生個々の学生生活のビジョンを可視化する作業の時などに活用されている。

しかし、本学科は開設から12年目を迎え、開設時から在籍する教員も少なくなり、「カードメソッド」について詳細が分からない教員もおり、「カードメソッド」を教授法に応用することが難しくなっている現状がある。

そこで、本学科の助手・助教で構成される「助手・助教会」において、本学科の特徴である「参画型看護教育」における教授法の一つの「カードメソッド」を活用し、「参画型看護教育における効果的な学びの場とは？」というテーマで学習会を開催した。本稿では、学習会の活動内容と、語りあうことでみてきた「教員と学生が共に参画して学びの「場」を創造するための教員の姿勢や役割」について報告する。

II. 助手・助教会について

1. 助手・助教会の目的

本会は「教育」「研究」「地域貢献」を3本柱とし、助手・助教同士の繋がりを深め情報交換を通して共に考えることで、「教員の資質の向上」に繋げることを目的として発足した。

2. 活動期間

2014年（平成26年）4月に発足し、今年で5年目を迎えた。開催頻度は、発足年度は1ヶ月に1回、2年目以降は2～3ヶ月に1回開催している。

III. 学習会の内容について

1. 学習会の目標および「カードメソッド」のテーマ設定

本会のメンバーの多くが、入職して1～3年目の新人教員である。個々の教育観について考えるという視点から、学習会の目標を『「カードメソッド」法の実践を通して、『自分の経験を伝える・相手の経験を聴く』体験から、参画型看護教育の効果的な学びの『場』について考える』とし、「参画型看護教育における効果的な学びの場とは？」というテーマを設定した。

2. 学習会の開催日時、開催場所

参加者は本学科の助手・助教会のメンバーであり、担当科目等との調整の結果、2018年5月25日16時30分～21

時とした。場所は、看護学科棟内の講義室を使用した。

3. 学習会参加者の概要

学習会の対象者は、本学科の助手（8名）、助教（6名）の計14名で構成されているが、参加者は、助手（7名）、助教（3名）の計10名であった。参加が適わなかった4名のうち2名は、「ゆんたくカード」とそこに込めた思いについてのメモを参加者に託していたため、計12名の「ゆんたくカード」（24枚）を使用した。参加者のうち3名は本学科の卒業生であり、「カードメソッド」の技法が身についていた。

4. 学習会の展開内容

学習会開催にあたり、参加予定者には事前準備として「ゆんたくカード」を2枚ずつ記載してもらった。記載内容は①1行目に学習会の日付とテーマ、②2行目から自分が率直に感じたこと（具体的に）、③最終行は自分の氏名をフルネームとした。

学習会の導入においては、学習会の目標の共有と「カードメソッド」法を行うに当たっての留意点の説明を行い、参加者を2つのグループに分けて図解作成（グループワーク）を行った。グループ編成では、「カードメソッド」の実践経験者が偏らないよう配慮した。また、「カードメソッド」実践経験者には、そのグループのファシリテーター役も担ってもらい、「自己との対話」「他者との対話」を意識してグループワークを進めるようにした。図解完成後は、それぞれの図解の説明を行い内容の共有とフリーディスカッションを行った。グループワーク中はファシリテーター役を中心に「ゆんたくカード」に込められた思いの確認や思いを損なわず的確な表現の見出し作成などについて活発なディスカッションを行った。学習会終了後、参加者からは「完成までに長時間かかったが、楽しみながらできた。」「（この機会に自分たちの思いを）学生にも見てもらいたい」との感想があり、後日、本学科棟内に掲示し学生から感想をもらった。

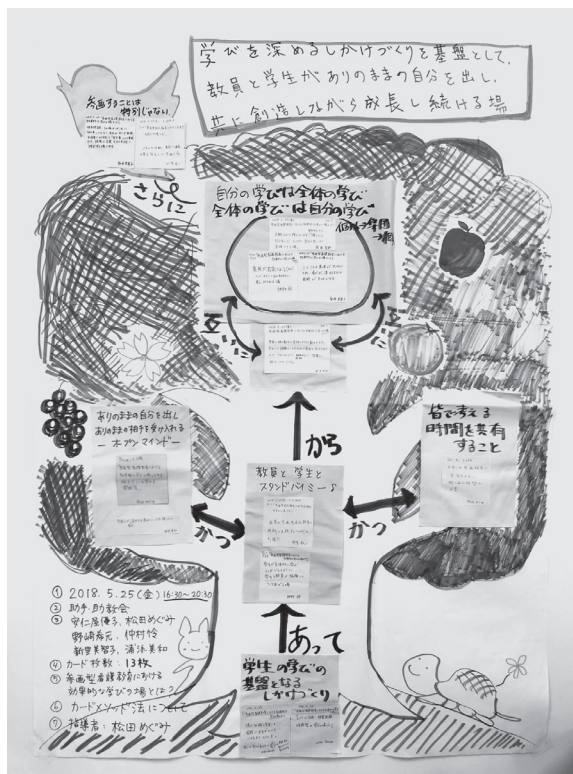
5. 参加者によるまとめの内容（文中の【 】は「ゆんたくカード」の見出しである）

1) グループA（写真①）

教員として、学生に対し得た知識を実践に結びつけていけるような取り組みや、ICTの活用等学びの場づくりなど、【学生の学びの基盤となるしかけづくり】が重要であり、そのことが根底になると考えた。そこから派生するイメージで「大きな木」として表現した。そして【教員と学生とスタンドバイミー♪（教員と学生がお互い近い関係で寄り添い）】（幹）と、協働することが欠かせず、お互いの気持ちを高めて行けるような場づくりとして、

【ありのままの自分を出し, ありのままの相手を受け入れるーオープンマインドー】(枝)とし, また普段は各々好きな方向やペースで様々な事を進めていても, 時には立ち止まり【皆で考える時間を共有すること】が重要であると考えた。これらのことが根幹にあり, 個と全体に責任を持ち学習する上で物事を批判的に考えることから, 個と全体の学びが深まると考え【自分の学びは全体の学び全体の学びは自分の学び(個人⇄集団)】と表現した。また, 日常生活から参画することが普通であり【参画することは特別じゃない】ことを, 鳥として巣立っていく様子として表現した。

以上のことから, 参画型看護教育における効果的な学びの場とは, 「学びを深めるしなげづくりを基盤として, 教員と学生がありのままの自分をだし, 共に創造しながら成長し続ける場」と考えた。



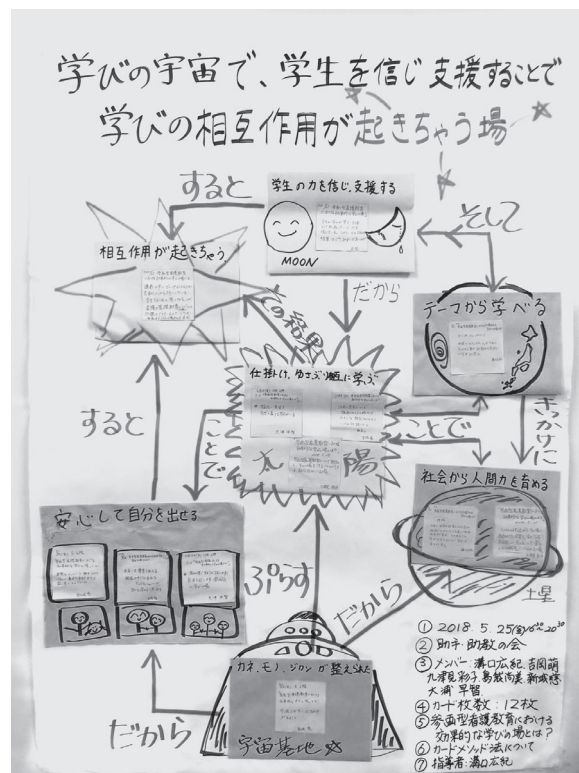
写真①

2) グループB (写真②)

大学などの教育の場だけではなく, 地域住民とのかかわりなど社会全体が広大な学びの場となっていると考え, 「学びの宇宙」と表現した。学生は, 【カネ・モノ・ジカンが整えられた】環境の中におり, だからこそ【安心して自分を出せる】。また, そのような環境はボランティアなどに参加する中でも存在し, ボランティアなどを通して地域住民とのかかわりの中で, 【社会から人間力を育む】ことにつながる。さらに, 学生はゼミワークの中

で仲間と共にディスカッションを行うことで, ディスカッションの【テーマから学べる】チャンスを得ており, その際に教員は【学生の力を信じ支援する】かかわりを実践している。教員が支援を行う中で, 【しなげ, ゆさぶり(学生と教員が)相互に学ぶ】作用が起きてくるのだと考えた。この学びの相互作用は, 教員の関わり方によって良い方向にも悪い方向へも作用する可能性を秘めており, 教員が意図した作用とならなかったり, 意図したところで作用が起きなかったりすることもあるという面で, 自然発生的に【相互作用が起きちゃう】と表現した。

以上のことから, 参画型看護教育における効果的な学びの場とは「学びの宇宙で, 学生を信じ支援することで学びの相互作用が起きちゃう場」であると考えた。



写真②

IV. 考察

本会は「教育」「研究」「地域貢献」を3本柱とし, 助手・助教同士の繋がりを深め情報交換を通して共に考えることで「教員の資質の向上」に繋げることを目的としている。活動内容については, その時の担当者に委ねられ, 3本柱を軸に活動内容を検討し実施している。これまでは「教育」に関するテーマが多くを占め, 臨地実習における学生の様子や, 普段の学生との関わりを通して「教育的なかわり」について検討していた。

本会のメンバーの多くは, 本大学で初めて採用される

新人教員が多く、試行錯誤しながら職務をこなしており、すぐ目の前にある「教育」に関することが活動に取り上げられやすい。しかし「教育」について考える時、本学科の教育の根幹である「参画型看護教育」を念頭におく必要がある。これまで「参画型看護教育」について皆で話し合い共有する場がなかったため、新人教員が多い本会において、皆で考え思いを共有することが重要であると考えた。そのことから、目標に『「カードメソッド」の実践を通して「自分の経験を伝える・相手の経験を聴く」体験から、参画型看護教育の効果的な学びの「場」について考える』掲げた。

当初、学習会は3時間を予定していたが、参加者の希望により予定時間を大幅に超える4時間半を費やすことになった。しかし、時間が足りない位であり、図解作成後は心地よい疲労感とまだ話し足りない感覚が残った。今回の学習会を通して、教員は【教員と学生とスタンドバイミー♪（教員と学生がお互い近い関係で寄り添い）】という姿勢と【ありのままの自分を出し、ありのままの相手を受け入れるーオープンマインドー】、【安心して自分を出せる】場をつくる役割であると理解していることが明らかとなった。Watson²⁾は、ケアリングを構成する因子であるカリタス・プロセスの中で、「真の意味で信頼に基づく関係を築く」こと、「相手の話にじっくりと耳を傾け、肯定的な感情のみでなく、否定的な感情も自由に表出することを助け、それを受容する」ことをあげている。【ありのままの自分を出し、ありのままの相手を受け入れるーオープンマインドー】、【安心して自分を出せる】という場を作ることは、Watsonが述べているカリタス・プロセスの核となるかわりであり、ケアリングの視点も養われていると考える。また標題に「学びを深めるしかけづくりを基盤として、教員と学生がありのままの自分を出し、共に創造しながら成長し続ける場と「学びの宇宙で、学生を信じ支援することで学びの相互作用が起きちゃう場」と表されているように、学生と教員はタテの繋がりではなく、ヨコの繋がりであることを認識していた。これらのことから、新人教員でもすでに「参画型看護教育」の根幹を捉えていることが分かった。しかし、学生は教員に対して話しやすさや相談しやすさを求めていることも多くみられ、ヨコの繋がりとなった時のリスクとして、学生にとって教員が単なる友達のような存在になる可能性がある。そのため、教員は学生自らが学ぶ主体として成長できる¹⁾よう意識して、関わり続けることが重要だと考える。

また、今回の学習会において「自己との対話」「他者との対話」を通して「参画型看護教育」について共通認識を図ることが出来たと考える。



写真③



写真④

V. おわりに

今回の学習会で「自己との対話」「他者との対話」を通して、「参画型看護教育」について共通認識を図ることが出来たと考える。本学科の教育の根幹である「参画型看護教育」について検討し、共通認識を図っていく場を意識して作り上げることが重要であると考えます。

引用文献

- 1) 金城祥教, 参画型看護教育 理論と実践, 名桜大学 人間健康学部看護学科, 2016.
- 2) Jean Watson, ヒューマン・ケアリング理論: 理論の核とカリタス・プロセス, 日本赤十字広島看護大学紀要, 10, 2010.